露ふかきかたばみ草をたもとにて玄ぼりかくればおもかげもみず

〔七十一番歌合中〕卅三番　右　鏡磨

水かねやざくろのすます影なれや鏡とみゆる月のおもては

〔醒睡笑二〕謂被謂物之由來

一いづれもおなじ事なるを、つねにたくをば風呂といひ、たてあけの戸なきを、柘榴風呂とはなんぞいふや、かゞみゐる、いるとのこゝろ也、

〔俳諧之連歌獨吟千句〕姉何第四

玄やくろなりけりいのちなりけり

かゞみとぎさ夜の中山けふこえて

〔狗鴉集九秋〕秋は柘榴の實を好む人　月ほどな鏡のくもりとぎはらひ　重頼

〔新撰字鏡竹〕簽、匳、同力鹽反、鏡波古、

〔惠慶法師集〕ある人の鏡の筥に

朝日さすかゞみの山はくもらねど峯の朝霧たえずもあらなむ

〔後漢書十皇后紀〕光烈陰皇后、諱麗華、略中七年平永崩、略中明帝性孝愛、追慕無已、略中從席前伏御牀、視太后鏡匳中物也、匳、鏡匣音廉、感動悲涕、令易脂澤裝具、左右皆泣、莫能仰視焉、

〔雅亮裝束抄一〕もやひさしのてうどたつる事

その二かゐのみなみに、略中それにならべて、みなみにかゞみのはこ、やつはながたなるが、おほきなるををくかゞみ、せたなごひいれたり、まもり、ひれ、あだいあり、そのていからくしげにおなじ、かゞみをとりいだしてかくれば、はこはふたして、もとの所にをくべし、

〔延喜式四伊勢大神宮〕太神宮裝束

鏡筥